

「炭焼長者」譚が語る愛と平等の思想

日韓の比較と分析を通じて

朴 福 美

Love and Equality in *The Wealthy Charcoal Farmer* A Comparative Analysis in Japan and South Korea

Pogmi PAK

、はじめに

韓国¹⁾の「炭焼長者」譚については前号で「薯童伝説」や巫歌「三公本解」などとともに取り上げた。日本で便宜的に使われている<初婚型><再婚型>という下位分類は結婚回数が必ずしも初婚、再婚との整合性がないし、韓国では使われていない。また初婚も再婚も譚の進行、結末にあまり違いがない。このため韓国の「炭焼長者」譚の下位分類を女が家を出る原因に注目して<権威的家父長型><産神問答型><青霜寡婦型><観相型>の四つとした。

日本の「炭焼長者」譚は「日本昔話大成」²⁾から炭焼長者・初婚型の44話を<初婚型>、炭焼長者・再婚型の14話を<再婚型>、産神問答の24話を<産神問答型>として下位分類の名称とする。日本と韓国の下位分類を、対応関係に留意して整理しておきたい。

日本	初婚型	産神問答型	再婚型	
韓国	権威的家父長型	産神問答型	観相型	青霜寡婦型

* <初婚型>と<権威的家父長型>はそれぞれ父親の部分を除くと対応する。

* <産神問答型>は日韓とも同じ名称を用いる。

* <青霜寡婦型>は寡婦が家を出るまで、<観相型>は父親が死ぬまでを削除すると<再婚型>に対応する。

民間説話は総じて冒頭部と結末部が変化しやすいというが、この下位分類は冒頭部の違いを示すものでもある。

韓国の「炭焼長者」譚はユングの分析心理学的方法をもちい、金塊は「自己」であり、結末部で父親に孝養を尽くし、前夫と再び暮らすという韓国特有の結末部は女主人公が自己の否定的人格を認め受け入れていくという高い精神性を示しているとした。

韓国の「炭焼長者」譚は四つの型すべてに父親が登場し、強い存在感があるのだが、その隣の国の日本の「炭焼長者」譚は反対に父親の存在が希薄であることが言われる。同じく儒教を国の哲学とした国で、儒教を代表する家父長がなぜこのような反対の様相を示すのだろうか。まずはそれぞれの父親像を探り、順次夫像、娘や妻の像と進めて「炭焼長者」譚の思想にたどり着きたいと思う。

下位分類とその要約をあげる。

< 権威的家父長型 > 要約

- 1、地位や財産のある父親が三人の娘に誰の徳で生きているかを聞く。
- 2、姉たちは父のおかげと答えるが、末娘は自分の徳だと答えたために家を追い出されたり、身一つで炭焼きに嫁に出される。
- 3、山中の一軒家に一夜の宿を乞い、翌日老婆の代わりに炭焼き場に昼食を運ぶ。
a、炭焼き釜が金塊 b、水汲み場や石堀が金塊 c、女が祈ると石が金塊になる
- 4、夫を説き伏せて石 (= 金塊) を売り、大金持ちになる。娘が売る方法と場所などを指示する。
- 5、実家の没落を知る娘は知恵を働かせて父親と再会する。
a、娘の名前を叫ぶ門を作る b、娘が父親を尋ねる c、乞食宴会を催す
- 6、娘は父親に自分の徳で生きていること、実家は自分の徳で栄えていたことなどを確認して、孝養を尽くす。

< 産神問答型 > 要約

- 1、塩売りや借金をしに行った男が行き暮れて野宿をしていると産神の問答を聞く。同時刻に生まれた子のうち男児は乞食運、女児は福運だと知る。家に帰ると妻が男児を、隣の白丁宅に女児が生まれている。
- 2、二人を結婚させ家は栄えるが、父親が死んだ後息子は白丁の妻を嫌って追いだす。
- 3、女は山中の一軒家に一夜の宿を乞い、翌日炭焼場に昼食を運ぶ。
a、炭焼き釜が金塊 b、土手の石が金塊
- 4、夫を説き伏せて石 (= 金塊) を売り、大金持ちになる。妻が売る方法や場所を指示する。
- 5、前夫の没落を知る白丁妻は、知恵を働かせて前夫と再会する。
a、乞食宴会を開く b、前夫が物乞いに訪れる c、自ら前夫を訪ねていく
- 6、a、妻は身一つで、または財産を半分に分けて前夫と暮らす

b、前夫を養う

< 観相型 > 要約

- 1、観相のできる宰相が生まれた息子の相を見るに乞食運。自分の死後息子が乞食に陥るのを防ぐために全国を歩き回って福運の娘を探す。娘は最下層の身分の白丁。
- 2 以下は< 産神問答型 > と同じ。

< 青霜寡婦型 > 要約

- 1、a、青霜寡婦（子のない若い寡婦）となった嫁の将来を案じた義父が嫁の葬式を出し、実は密かに家から出して、自由に生きる道を与える。
b、青霜寡婦になった女が当てもなく婚家を出る。千両の占いをすると、炭焼と結ばれると出る。
- 2、女は山中で行き暮れて炭焼きと結ばれる。
- 3、金塊を発見して大金持ちになる。

< 初婚型 > 梗概

殿様の娘が炭焼きの妻になれという夢を見る。貧しい炭焼を探して妻になる。食べ物がないので妻が小判を渡し、米を買いにやると夫は途中で池に浮かぶ鴨（鶯・雁・鴛鴦・鯉等）に小判を投げつけて帰る。妻が小判のことを教えると、そのようなものは炭を焼くところに行くだけでもあるという。妻が行ってみると本当にたくさんの黄金があり、二人は長者になる。

< 再婚型 > 梗概

妻が、金使いがあらいい、人の出入りがはげしい、麦・粟飯を食わせた等の理由で離縁される。妻が出ていった家はおちぶれる。妻は放浪ののち炭焼きと再婚し、黄金・酒泉を発見して長者になる。前の夫は箕作りとなって各地を売り歩くうちに前妻の家に着く。前妻とは気づかず箕を売るが、しばらくしてそれに気づき、驚いて死ぬ。妻は前夫を手厚く葬り、そこを荒神様として祀る。またはそこから忘れ草（煙草）が生えてくる。

< 産神問答型 > 梗概

百姓が雨宿りをしていて「分家に福分のある女子が、本家に福分のない子が生まれる」等という神様の会話を聞いたり、娘が夜中に目を覚ますと床下で神様が「この家の娘は炭焼のもとに嫁に行くように定めた」という会話を聞いたりする。あとは< 再婚型 > と同じ。

* 梗概の部分は「昔話・伝説必携」³⁾から引用

、日韓「炭焼長者」譚の人物像

1) 韓国の父親像

< 権威的家父長型 > の父親は誰の徳で暮らしているかと、娘たち三人を一人ずつ呼んで聞く。娘が5～6人であったり、毎日聞いたりもする。父親のおかげで暮らしていると誰もが思っているはずなのに、このように脅迫的なまでに父親の権威を確認し、儀式的な答えを要求するのはなぜだろうか。

家父長という権威の「力の行使は、人生の問題を解決できるひとつの方法ではあるが、満足のいく方法ではない。力の行使は、行使した人間を力という自らの手段に依存させ、その人間に孤独とおびえを感じさせる」⁴⁾。父親は力の行使をやめるといふ根本的な解決策はとらず、孤独感やおびえを娘たちから癒されようとするだけである。だから、何度「お父様のおかげです」と聞いても満足はいかない。家父長の権威乱用の父と言える。

< 産神問答型 >、< 観相型 > は男児の父親であり、直接の言及はないが男児は家督相続者である。家督相続者の乞食運はすなわち家の没落であり、断絶につながる。家の断絶を防ぐのは家長としての責務だから他家の娘の福運をくすねてもかまわないのが家父長たる父親の論理である。家督相続者の息子にとっては慈父かもしれないが、娘にとっては搾取する義父である。

< 青霜寡婦型 > は娘の父親でも息子の父親でもなく、嫁の父親である。そして二つの義父像がある。若くして息子が死んだために、嫁は若くして寡婦となり子もない。朝鮮朝時代にはそんな立場の女が実家に戻って再婚することは世間体上できなかった。だから青霜寡婦という言葉が生まれたのである。死ぬまで嫁は婚家に留まる。

そんな状況の中で一人の義父は世間のしきたりを破り、嫁の実家にも娘は死んだことにして、自分も知らないところに嫁を旅立たせる。嫁の真の幸せを願い、嫁の力を信頼できてこそその行動である。もし嫁が逃亡に失敗してそれが世間に知れば嫁は勿論、嫁の実家も義父自身も世間から非難を浴びるのは間違いない。そんな危険を犯してまで嫁の幸せを願って行動する父は、普遍的愛を持つ慈父と言える。

もう一人の父親は嫁が自ら婚家を出ることから考えて、嫁をいたたまれない状況に置いているか、嫁に無関心であると推測される。青霜寡婦とともに暮らすことは世間の賞賛は得られても日常的には厄介な存在である。しかし立場上それを口にするにはできないから、せめて無視するほかない。そんな嫁は世間の非難は覚悟して、運を天に任せて婚家を出る選択をする。周りには相談する人もいないから、僧の助言や千両の占いに頼る。無関心な父親である。

< 青霜寡婦型 > には嫁の立場から言うと最高と最低の二つの家父長の型が存在する。なお嫁が婚家を捨てて出奔するために、嫁と義父との再会はありえない。

以上父親像をまとめると	権威的家父長型	権威を乱用する父
	産神問答型	家督相続者には慈父、嫁には搾取する父
	観相型	同上
	青霜寡婦型	普遍的愛の慈父、無関心の父

2) 日本の父親像

<初婚型>には殿様であり、公卿であり、または金持ちであったりする立派な父親がいる。しかし娘の不縁を心配して占いをしたりする父親がわずかにいるだけで、具体的な行動がほとんどなく、その存在が希薄である。家父長制度下での結婚は父親の地位や経済力で決まるのだから、娘の不縁は父親の責任である。しかし自分の地位や経済力を利用して嫁入り先を探す父親は存在しない。娘は嫁に行けば嫁入り先の人になり、実家の存続と繁栄には直接的には役に立たないから、家父長者にとって娘は価値がない。それゆえ娘の嫁入りにも無関心である。無視される生活は心安いはずがない。娘がそんな生活から合法的に逃げ出す方法は結婚だろう。だから娘はよい夫を持たして下さいと二年三ヶ月ものあいだ神様に誓願したり、易者に見てもらったりするのである。娘には無関心な父親といえる。

<再婚型>は結婚している夫婦の話から始まって、<初婚型>以上に父親が登場しないので父親像もない。

<産神問答型>は韓国と構造がほとんど同じなので、父親像も家督相続者には慈父、嫁には搾取する父となる。

以上から日本の父親像は	初婚型	無関心な父親
	産神問答型	家督相続者には慈父、嫁には搾取する父

「炭焼長者」譚の父親像は女の立場から見たとき権威乱用、搾取、家督相続者にのみ慈父、無関心などと否定的で、肯定的父親像は<青霜寡婦型>における普遍的愛を持つ慈父のみとなる。日本にはこの肯定的父親像はない。

3) 韓国の夫像

<産神問答型> <観相型>に父親の死によって家父長権を受け取った夫がいる。夫は科挙の試験を受けられないとか、親類・友達に色々言われるとかの理由で妻を追い出し、妻自身も子供たちの将来の結婚を案じて自ら家出したりするが、これらは妻の白丁という最低層の身分が離婚の原因であることを示す。夫は身分差を他の何かで埋め合わせようという努力はしない。妻という個人ではなく、妻が生得の、妻の努力ではどうすることもできない身分をひたすら嫌って、暴力を使ってまで妻を追い出す。家父長の力を乱用し、ヒエラルキー意識にがんじがらめになった夫である。

<権威的家父長型> <産神問答型> <観相型> <青霜寡婦型>にはすべて炭焼夫が登場する。炭焼夫は妻が炭焼釜の石をはずせと言うと明日からどうして食べていくのかと論し、石を市場で売ってくるように言われると売れるはずがないと反対する。結局は妻に説得されて石を売りに行くのだが、ちゃんと議論がなされていることから民主的な夫と言える。

夫像と身分関係が、結婚の存続とどんな関係があるかを整理しておきたい。

<権威的家父長型> ; 民主的夫。身分は夫が低く、妻は高い。結婚継続。

<産神問答型> ; 権威乱用・ヒエラルキー固執夫。身分は夫が高く妻が低い。離婚。

民主的夫。身分は夫が低く、妻は外見上高い。結婚継続。

<青霜寡婦型> ; 一度目は夫の身分も妻の身分も高いが、夫が死ぬから検討の対象外。

民主的夫。身分は夫が低く、妻は外見上高い。結婚継続。

<観相型> ; 権威乱用・ヒエラルキー固執夫。身分は夫が高く妻が低い。離婚。

民主的夫。身分は夫が低く、妻は外見上高い。結婚継続。

4) 日本の夫像

<初婚型>の夫は炭焼小五郎が代表するような名前をほとんどが持ち、娘には名前がない。金銀財宝が炭焼夫のテリトリー内にあり、ピカピカ光る金を山のように捨てていたり、愚か者だが神を信心していたりする。幸運で欲のない、少し愚かな夫。

<再婚型>は最初の結婚状態から始まっていて結婚のいきさつが説明されない。取り立てて言わないのは一般的な結婚だからであるし、一般的な結婚は身分の差がないことを意味する。長者とか金持ちの家とか言われることがあり、傾向として両方とも身分は高い。

離婚は新米を炊いたとか正月に粟飯を食わせたとか食事に関するものが原因であり、その他妻の使いがあらくて富貴になれないとか、よく働くが嫌いだとかがある。これらは夫が妻を気に入らないために言いがかりをつけて追い出したことになる。夫としての自覚がない、わがままな子供のような未成熟夫である。ほかに神がこの家が滅びるという会話を聞くとか、舅・姑がいじめるとかで、妻が長者の婚家に見切りをつけて自らの意思で出ていくものをかなりある。福神が見切りをつければ家は滅び、それは家長である夫に家を存続させる能力がないことを意味する。無能力な夫である。

二度目の夫の身分は類型化できない。女が来てから豊かになるのであれば、再婚の夫の身分が低いとみるが、金持ちとはっきり言われるものも多い。二度目の夫が妻の前夫を養うことにも理解を示す人柄もあるが、前夫の没落中心に語られるために、再婚の夫についてはあまりよくわからない。

<産神問答型>も身分関係が韓国に比べると類型化できない。金持ちと貧乏人、旦那と下女など身分差につながるものが半数以上を占めるが、どちらも長者であるとかまったく身分を言わないものがある。言わないのは身分差がないからとすると、身分差がないものも相当数ある。

夫が妻を追い出す原因は、身分差が明確な場合は離婚の原因も身分差となる。夫婦間の著しい身

分差がないとき、妻が大酒のみで贅沢をするなど女の素行を原因とするもの、男が朝寝をしたいという怠け心が原因のものもある。貧乏になったので離縁したというものが何篇がある。妻が貧乏に耐えられず夫を捨てて逃げ出したことになり、貧乏の責任は夫にあったとしても離婚の責任は夫だけとはいえない。この場合は妻に恵まれない不運な夫となる。＜産神問答＞型の夫はヒエラルキー固執夫と、不運な夫の二つの夫像がある。

二度目の夫に関しても身分関係が類型化できないのは＜再婚型＞と同じである。貧しいのが半分、分限者とか金持ちといわれるものも半分ほどある。前妻であったことを知った上で前夫が前妻に養われる各編があるが、前夫は自分の非を悟ることはない。

以上日本の夫像は身分関係が類型化できない分、夫像もさまざまである。韓国のもと同じく夫像と身分関係が、結婚の存続とどんな関係を持つかを整理しておきたい。

＜初婚型＞；幸運で、欲がなく、少し愚かな夫。身分は夫が低く妻が高い。結婚継続。

＜再婚型＞；未成熟・無能力夫。身分は夫、妻ともに高い。離婚。

愚かだがやさしい夫。身分は夫が類型化不能、妻は高い。結婚継続。

＜産神問答型＞；ヒエラルキー固執夫・不運夫。身分は夫・妻ともに類型化不能。離婚。

優しい夫。身分は夫・妻ともに類型化不能。結婚継続。

5) 日韓の夫像

日韓の家父長像の分析によって得られた結果から、男と女の身分による結婚の継続と離婚の傾向をまとめてみた。身分の類型化が不能な場合は含まれない。

夫の身分	妻の身分	継続 / 離婚	
低	高		炭焼きの夫・産神問答型と観相型のこじきになった前夫
高	低		産神問答型・観相型の一度目の夫、
高	高		再婚型一度目の夫、

（注）ここでの身分は外見上のものも言い、法律的身分という意味とは一致しない

このまとめからみて「炭焼長者」譚における結婚の存続は夫の身分が低く、妻の身分が高いときとなる。実際の結婚が一般的には同じ身分間でなされることを考えると、ここで言う身分は妻の財力・能力・奉仕などと読み替えることも可能であろう。すると家父長制での結婚は妻の能力や献身が夫を上回るときに成り立ち、対等や下回るときはうまくいかないことになる。

日本のものは夫が暴力をまったく振るわないこと、離婚には妻にも原因があるとするのが目立つ。また韓国の男たちが他家でもらい食いの零落を語るのに比べ、日本の夫たちは籠や箕売りであり、乞食といわれるのはすくない。

韓国の家父長たちは暴力が非難されるし、零落した姿もこじきと言われる一方、間違いを認める

理性をもつ家父長であり、和解の能力も残しているが、日本の家父長の夫は死ぬ。

以上から家父長像は権威乱用、家督相続者への愛、娘や嫁に無関心や搾取の父親とヒエラルキー固執・無能力・未成熟・愚かな夫といった否定的姿である。しかしそれらの間違いを認めれば和解が成立し、認めなければ死に至る。民主的な夫は豊かな生活をする事が語られている。

6) 韓国の娘・妻像

<権威的家父長型>に登場する娘は、その自立心が強調される。父親の怒りに触れても自分の言動を詫びることなく、出て行けというなら出て行きますと答え、上等の絹服に着替え、一握りの米などを身につけて家を出る。明らかな身分差にもかかわらず、その身分をかさに着るようなこともなく、娘のほうから求婚する。娘は何よりも自分の気持ちに正直であり、世間の価値判断である儒教的な礼節に盲目的に従うことはない。

娘は結婚して妻となる。炭焼の妻は、金塊の価値を知らないため石を売ってしづる夫に「私の言うようにしなさい」と命令したりして、否定して出てきたはずの父親を再現したりもする。しかし普通は夫を説得して金塊を売らせ、大金持ちになる。石にしか見えない金塊の価値を知り、父親や前夫がどのような境遇になるかも見通している非凡な洞察力を持つ。

再婚の夫を去り、前夫に戻るときも再婚の夫やその間に生まれた子供、郡守などと議論しあって決定する。または自分の決心を再婚の夫に告げる。

自分を追い出した父親や前夫に対して恨みや復讐で対するのではなく、非を認めさせることに力を尽くし、認めた後は父親に孝養、前夫に戻るといふ愛で対する。娘や妻の過失は全く言われない。

韓国の女は自立的・民主的で能力が高く、献身的な愛の持ち主として語られている。

7) 日本の娘・妻像

<初婚型>の娘は超自然の力に導かれて炭焼などの貧しい男と結ばれる。超自然の力に娘がすすがるのは結婚縁がない・不器量・黒痣があるなど、半分以上が娘の側に責任がある。だから娘は自分の力で夫探しの旅に出る。身分差も意に介せず、娘のほうから結婚の申し込みをする。自立的な娘である。

娘の能力に関しては炭焼夫のテリトリーにある金を発見するきっかけを作る役目をするものが半数以上となる。娘の能力のみによる豊かな生活は持参した小判とか、娘が見るとそれは大判小判であるとか福槌などの表現を取り、少ないがある。娘が福槌を持参して、それが富を生む福槌系は魚が片目になるとか、魚を食べると人が死ぬとかの不吉な落ちがついたりする。

炭焼夫はほとんどが名前を持つが娘は父親の身分でいわれるだけで名前はほとんどない。

<再婚型>における離婚の原因は夫が原因とするものが多いが、福神の会話や夢を信じて妻自ら家を出るものは妻に原因があるといえなくもない。温かい飯食いたさに屋の棟を三日間続けて射たために福の神が逃げてしまう、まったく妻が原因とするものがある。夫が温かい飯食いたさに福の

神を追い出す各編もあるところから、男と女の位置がひっくり返っているのだが、この各編も女の地位切り下げの延長線上に位置するものであろう。

妻の能力については一度目の結婚では夫・妻の身分が同じなのではっきりしない。二度目の結婚は男が金持ちといわれる場合妻の能力はわからないが、そのほかの多くは女が小判発見のきっかけとなったり、二人で働いて金持ちになる。酒泉発見で大金持ちになるのは女の能力のみによる。

<産神問答型>の離婚原因は身分が原因とするものが多いが、貧乏やけんかなど、双方にあるものもかなりある。貧乏が原因というのは貧しさに耐えられない妻にも責任がある。そして産神が女の子に与えた福運は最初の結婚では実現しなかったことになる。産神が女兒に大きな富の福分を与えたのに、貧乏が原因で離婚に至っては話に整合性がない。産神という言葉は伝承できてもその信仰までは根付いていなかったことも考えられる。

二度目の結婚先が金持ちといわれるものが半分近くあり、この場合女は小判発見のきっかけも、豊かになる能力も発揮しない。のこりの半分ほどが女の力があって豊かになる。日本の産神の予言は女兒自身が福運をもたらす力を与えられるのではなく、夫の力であれ福神の助けであれ、結果的に豊かな生活ができることを意味している。

再婚後の妻は豊かな暮らしをして、そこに零落した前夫が訪れる。前夫への態度は丁重である。小判入りの握り飯を前夫に何度も与えるなど、同情心に富む。

日本の女は容貌が悪い、離婚の原因を受け持たされる、能力が削られる、名前を持たないなどとその価値が切り下げられている。それでも美しく、けなげで能力の高い女が多く、同情心に富む。

、「炭焼長者」譚の思想

登場する男像は家父長的力を行使する男は零落し、あるいは死ぬが、民主的な炭焼男は女の協力を得て豊かになっている。女像は韓国の場合一貫して過失が言われず、日本の女は価値の切り下げをされるがそれでも富を生み出し、やさしさに満ちた存在である。総体的に男は否定的に、女は肯定的に語られている。

昔話では主人公が旅をする⁵⁾。「炭焼長者」譚では女も男も旅をするが、女の旅は幸せをもたらす、男のたびは零落の旅であり、死をもたらす旅であるとき、主人公は女であるといえよう。主人公が家父長的力に対抗して幸福を得ることができたのはなぜか。

1) 娘の愛、父の家父長的力

エーリッヒ・フロムは「愛と力は、両立しえない対立物であり、人間行動の基本的両極として愛と力ほど正反対の方向をとるものはほかにないであろう。愛も力もわれわれの本性に深く根ざしたものである⁶⁾」という。家父長は支配するだけでは満足せず力を行使して、子宮のように安全な家庭から娘を追い出す。愛と力が両立しえない対立物だから家父長の力に対して娘のもつものは愛

となる。

父と娘は肉親であり、肉親にのみ注がれる愛は近親相姦的で愛としては未熟な状態である。娘は家父長的力に対抗する成熟した愛の準備ができていないから家を出る。家父長の力は娘の未熟な愛を打ち負かした。それは同時に現世界が愛よりも力が強いことを語っている。

しかし娘は結婚によって自分と違う社会的背景をもった他人である男を愛し、成熟した愛を獲得する。自分とは違う他人といえども、それはこの世界を支配する家父長文化の影響をあまり受けていない男が望ましい。それは人里はなれた山の中に暮らす炭焼青年である。それでも娘は結婚に際しては家父長的文化を洗い落とすかのように湯浴みをさせる。湯浴みモチーフは韓国に多くあり、日本にもある。それから娘は成熟した愛を小判や金塊として夫に差し出す。愛を知らない男は小判の価値も知らないから、それを鴨などに投げつけてしまう。妻が愛は大切なもので捨ててはいけなさと教え、その忠告を受け入れた炭焼夫は愛という能力を開発して豊かになる。韓国に小判打ちつけモチーフはなく、妻の指図に従い金塊を市場で売ることになる。日本の女が差し出した小判が愛であるとき、韓国の女が発見した金塊も愛である。韓国の炭焼青年は母親と二人暮らしのことが多い。だから母親の愛は知っているのだが、他人である女との成熟した愛は初めての経験である。だから疑問を持つが、それでも捨てたりはしない。市場で売られる金塊、即ち父権制に対する母権制、力に対する愛の価値を俗世界の人間は認めない。しかしこの世界の最終段階であり、完成段階の夕暮れになって、金塊即ち愛の価値を知る家父長らしき人物が現れる。愛や平等の価値が認められた後の世界では、炭焼夫と妻はもちろん娘を追い出した父親も妻を追い出した夫もすべて豊かに暮らす。

日本の〈初婚型〉は、新しい家庭で娘が幸せになって終わる。愛は家父長制の強いところでは共存できないが、家父長制がないところでは愛が生きていることになる。

韓国の〈権威的家父長型〉はさらに続く。家父長は自分の思いどおりに人を動かすために力を行使し続ける。力という手段を強くするためにエネルギーを注ぎ込むと彼自身の生気がおとろえ、面白みもなくなり、ますます恐れられ、畏敬される。それは乞食の旅をする零落した父親の姿と重なる。零落した家父長が幸福な娘を発見する。父は力を行使して不幸になったはずの娘が幸福であることを発見したとき、自分の非を認める。娘はそんな父の理性を受け入れる。愛は勝利し、娘は父の理性を吸収した人間性の高次の段階に進んでいく。

2) 妻の平等と夫のヒエラルキー

〈初婚型〉〈再婚型〉は女を追い出すのが男であるという同じ構造を持つのに、なぜ二つの型が存在するのか疑問である。しかし「炭焼長者」譚が母系的な思想を主張し、父権制の批判をする構造と見れば、この二つの型の並存はむしろ必然とも言える。つまり家父長制は父のみ、又は夫のみを論じては不十分で、必ず父と夫を語らねばならない。

イブセンの「人形の家」でノラは、父親と夫にまちがった扱いを受けていたことを悟り、人間とし

て生きていくために夫を捨てて家を出て行く。女にとって家父長制の力は父であり、夫が象徴するものだから、それを否定するとき父からも夫からも去る。しかし父と夫は、肉親と他人という点が決定的に違う。結婚が他人同士を結びつけるのだが、結婚が普通同じような階級同士結ばれるにしても、厳密な意味でまったく同じ階級や身分はありえない。

「母性的原理と異なり、父性的原理は法律、秩序、理性、ヒエラルキーによって規定されている。父親は最愛の息子一人に、つまり父親に最も似ていて、相続人、後継者としてふさわしいと見える息子に、財産や世俗の仕事を引き継がせる。だから父性中心的な息子たちにとっては、平等はヒエラルキーに、調和は不和に場を譲ることになる」⁷⁾

女が近親相姦的な家族との愛から結婚を契機に他人を愛する、より大きな愛に成長したとしても家父長となった男は力を父から継承し、父にはなかったヒエラルキー意識を妻に持つことになる。愛は強化されて力に対抗できてもヒエラルキー意識に負けて去るのだから、現世界は平等意識は弱いということになる。封建社会は身分社会であり、平等とは遠い社会であったことは誰の目にも明確である。

ヒエラルキー意識は身分差が大きいほどに明確になるから、<再婚型>の夫と妻の身分は大きいほど効果が上がる。初婚の女の身分は高いのに、再婚する女の身分が低くなるのは、ヒエラルキー意識の認知をしやすくするための変化といえるだろう。

家父長としては父も夫も同じものを体現しているから、夫もまた力の行使の副作用で自分を見失って前妻の前に姿を現す。女はそんな零落した前夫に愛のアプローチをする。愛は相手を理解し、相手に必要なものを与えようとする。病んだ前夫に愛は炭焼夫のときのようにむき出しでなく、受け取りやすいように飯や味噌に包まれて差し出される。しかし家父長的力の行使で人を支配することしか知らない前夫は小判入り焼き飯を口にすることができず、他人や犬にやってしまう。前夫は小判入り焼き飯をくれたのが娘や妻であることを認識したとき死ぬ。自分が追い出した娘や妻が幸せであるとき力の行使が無効であることを知り、力が死を迎える。

力の行使は「人間存在の最も重大な現象　死が避けられないことにおいて、力は役に立たない」「力の原理をひじょうにばかばかしいものにしてしまうのは、まさにこの死という究極の敗北の痛み」⁸⁾であり、家父長の力を行使した非を認識しない。父や夫も死を避けることはできない。

死んだ前夫を女は荒神由来譚の形を取ったりして弔う。命を生み、育てる母性は死者への哀悼も本質的なものとなり哀悼は自分を追い出した者にも捧げられるのである。女の祭祀者としての姿が立ち現れる。権威的力にしる衝突があればのちに和解もあり、死後には祭祀されてその死を悼まれもするが、娘や嫁に無関心な父には衝突の痛みもない代わりに和解の喜びも祭祀も受けられず、永遠に別の世界にすむことになる。

前夫が前妻であることを認識したり、しなかつたりして一生前妻に庇護されたり各編が日本のものに小数だが存在する。

3) 未来社会の展望

パハオーフェンは歴史図式を粗野で文明化されていない、自由な性交渉が行われる社会形態から出発した。歴史の第一段階は女性の自然的生産性に基礎をおき、婚姻も法律も、原理も秩序もない世界である。次に母権制的段階が設定される。母親が家族の長となり、社会の指導者を引き受け、偉大なる女神とされていた文化である。そして人間の発達の最高段階である父権制段階をおいた。父権制的社会構造は文明世界の歴史全体に典型的に見られ、父親が法、理性、良心、およびヒエラルキー的社會組織の原理の代表者として統治する。しかし人間は衝突を基礎として発達を遂げ、ますます高次の形態をとった調和に到達する。その未来社会は母権制原理と父権制論理を止揚した水準において、愛と平等へと還帰していくと予想している。

韓国の父や夫は死を迎えることはなく、家父長の力を行使して娘や妻を追い出したのが間違いであったことを認めたのちに受け入れられる。父権制論理が止揚されるのである。父権制と母権制の長所と短所を挙げてみよう。

	長所	短所
父権制	理性、法、科学、文明、精神発達の方向付け	ヒエラルキー、抑圧、非人間性
母権制	平等、普遍性、生活の無条件肯定	血及び土との絆、合理性欠如

<青霜寡婦型>の父親は無関心と普遍的愛の二つの型の義父がいる。無関心でいれば苦しみはないが、変革も起きない。無関心の対極にある普遍的愛の義父は嫁の生活が夫を愛し、子を育てるようにと道を切り開いてやる。嫁の葬式を出し、実は誰も知らないところで暮らせとひそかに逃がしてやる。それは嫁の実家にさえ秘密にされる。この義に与えられるのは嫁が幸福になれるだろう満足感のみである。まさに母権制の短所である血及び土との絆を断ち切った、父権制の長所である理性の行動である。

韓国の<炭焼長者>譚は夫の暴力を声高に告発する一方で父権制の長所を認識している。この認識があるからこそ父権制の短所を認識した後和解し、父親には孝養を尽くし、前夫とは再び一緒に暮らすという形でパハオーフェンの言う愛と平等に回帰した社会を安定的に語るのである。

4) 母系中心的な主張

儒教を国の哲学とした朝鮮朝、儒教を取り入れて支配した日本で「炭焼長者」譚のいくつかの点が儒教論理には相容れないものがあるので、これを母権制的な考えで解釈してみたい。

女からのプロポーズと結婚の回数；「母権制社会では、性の自由と無拘束が特に顕著で」、「純潔の要求を内容とする性道徳は、父権社会とこの社会の基盤にある経済的諸関係の発達とともに成立する」⁹⁾。女はほとんどが押しかけ女房であるし、十三軒嫁とか四十九度の不縁などの表現は単なる強調だけではなく、純潔の性道徳を否定する表現の可能性もあるだろう。

家長を引き受ける女；巫歌「三公本解」では娘が一時的に両親の目を見えなくする。また＜産神問答型＞では炭焼青年とその母と嫁の三人が話し合いで家長を嫁に決める各編がある。

離縁で女が子を連れて行く；父権制社会は「腹は借り物」という言葉が示すように、産む女より生まれる子供こそが大切なのだが、＜再婚型＞で夫が三歳の男児を添えて女を追い出すし、妊娠中に追い出したりする。母権制社会では「母系の家系のみが意味をもち、父親は子どもにとって血のつながらぬ赤の他人であった」¹⁰⁾とき、母が子を養育するのは暗黙の了解があるからと解釈できる。

竈神の祭祀者：パハオーフェンは「宗教的天分そのものが女性の特殊な「素質」 - 中略 - 宗教が母権制に特有なあり方」¹¹⁾ととらえる。韓国では父親や夫が死ぬことはないので竈神にはならない。また韓国の竈神は性が女である¹²⁾ために男の竈神は受け入れがたい。中国の「炭焼長者」譚は竈神由来の説明が顕著だというのが、日本のものも竈神として前夫を弔う姿が散見される。女房が寺を建ててやり屋根を買いだめた箕で暮らしたので箕（三井）寺という寺名の由来譚になるのも、司祭者としての女の姿を伝えるものとして理解できる。

、終わりに

「炭焼長者」譚では民主的な夫は死なず、家父長的な夫や父親は過ちを認めたり死んだりする。それは現在の力とヒエラルキーの父権制社会の中では愛と平等の母権制は両立できないているが、父権的なものが弱い、あるいはないところ、炭焼家が象徴するような下層社会では生き続けて、いつか父権を止揚した新たな段階の社会に至るとい構造を見ることができる。

「炭焼長者」譚を母系的な考えかたを使ってその構造を探ったが、この「炭焼長者」譚が語られた時代にパハオーフェンは知られていないだろう。アジアの家父長制に対する批判は力とヒエラルキーに向けられていたと言えるだろう。

現社会においてインドネシアのスマトラ島ではミナンカバウ族が母系制であるという。このような母系制社会の存在が「炭焼長者」譚を生んだのか、または関係なく世界的にこのような明確なメッセージがあるかは、アジア全体の「炭焼長者」譚と、世界の「炭焼長者」譚の比較が必要だろう。母権制が父権社会の反対で女が男を支配する社会ではなく、協調社会であり、父や母は具体的な特定の人物ではなく理念的、原タイプの父母である。

家父長制の力の支配の中でも日本はむき出しの武力で統治された期間が長い。そのために産神から乞食運を予言された男が乞食になるのは受け入れても、地位のある父親が没落し、娘に屈服するのは説話といえども受け入れられず、父親の存在が希薄になったのではないかと推測される。女の地位切り下げと、男の地位切り上げが韓国のものに比べて著しい。

韓国の「炭焼長者」譚が来るべき理想社会にまで向かっているのは巫堂（巫女、シャーマン）の精神文化と切り離せないだろう。巫堂はそれぞれタンゴル¹³⁾という担当地域を持っていて、女性社

会のネットワークの中心にいた。この社会に男は経済的な支援はしても、口出しは一切できなかった。家父長制社会を否定した女たちはさらには巫堂が取り入れた仏教の輪廻思想も排除した未来社会を目指している。巫堂の「三公本解」は末娘が金塊を発見したのは前世の因縁だと断言している。

また韓国の「炭焼長者」譚が時代相を濃く反映し、未来社会まで進んだために本来の形を多く変化させていることが考えられる。伝播ルートをたどるとき、この点が留意されるべきだろう。

(ぼく ぼんみ・本学非常勤講師)

註

- 1) 「炭焼長者」譚は朝鮮朝時代に語られた型現代に残っているのだから、朝鮮半島全体で語られていただろうが、資料とした「韓国口碑文学大系」が韓国で採集されたものであるために、「韓国」を使う。
- 2) 関 敬吾著『日本昔話大成3』角川書店 昭和53年
- 3) 野村純一・編『昔話・伝説必携』学燈社 1992
- 4) エーリッヒ・フロム、滝沢海南子・渡辺憲正訳「愛と性と母権制」新評論 1997 p.129~130
- 5) 「昔話の本質と解釈」マックス・リュウテイ、野村滋訳 p.196
- 6) エーリッヒ・フロム 同上 p.125
- 7) 同上 p.143
- 8) 同上 p.135
- 9) 同上 p.241
- 10) 同上 p.198
- 11) 同上 p.161
- 12) 韓国精神文化研究院 『韓国民俗文化大百科辞典』第1巻 p.101 竈神を男神とするものも済洲島などにある。
- 13) 同上 第6巻p.59~60

参考文献

- イブセン 山室静訳『人形の家』角川文庫
j・j・パツハオーフェン 岡道男・河上倫逸 監訳『母権論1・2・3』みすず書房1991~1995